

教育再生会議合同分科会  
議事録

内閣官房教育再生会議担当室

## 教育再生会議合同分科会議事録

日 時 平成20年1月22日（火） 17：32～18：26  
場 所 総理官邸大会議室

### 議 事 次 第

1. 開 会

2. 最終報告（案）について

3. 閉 会

（配付資料）

資料 社会総がかりで教育再生を（最終報告・構成）（案）

○野依座長 それでは、ただいまから教育再生会議合同分科会を開催いたします。

委員の皆様におかれましては、大変ご多忙のところお集まりいただきありがとうございます。

昨年の第一次報告、第二次報告、第三次報告の取りまとめに当たりまして、皆様から多大なご協力をいただきまして、改めまして感謝申し上げます。

本日は、最終報告に向けて議論を進めてまいりたいと思っております。引き続きご協力をお願いいたします。

(プレス退室)

○野依座長 それでは、議事に入ります。

本日は、最終報告（案）について、成案に近いものにしてまいりたいと思っておりますので、ご協力いただきたいと思います。

まず、事務局から最終報告（案）について説明していただきますが、本日の資料につきましては、取りまとめも近いこともありまして、会議後に回収させていただきますので、何とぞご理解いただきたいと思います。

それでは、事務局、よろしく願いいたします。

○山中副室長 配付しております資料に基づきまして、簡単にご説明させていただきたいと思います。

この資料につきましては、委員の皆様事前に配付させていただいており、すでにご覧いただいているかと思っておりますので、簡単にご説明させていただきたいと思います。

まず、最終報告（案）でございませけれども、運営委員会におきまして、報告はできるだけシンプルで分かりやすくということで、これまでの第一次、二次、三次報告で各論を詳しくまとめてありますので、シンプルに分かりやすくまとめようという基本思想でございませ。

「はじめに」ということで、今までの3つの報告があるということと、最終報告に当たりまして、これらを踏まえ、一次報告から第三次報告までの提言の実効性の担保ということを重視しているということで、教育再生が着実に推進されるということを書いてございませ。

「1. 提言の実現に向けて」ということで、これまで多岐にわたる課題の中から非常に絞って議論をし、提言してきたわけですが、全部の報告の提言、すべてが具体的に実行されるということで初めて意味を持つということで、しっかりとフォローアップをしていただきたいと思いますということをおっしゃいます。

次に、今までの提言の主な項目につきまして書いておきます。「教育内容」ということで、これを「学力の向上に徹底的に取り組む」、また「心身ともに健やかな徳のある人間を育てる」という項目に整理して、学校、教育現場での取り組みについて。また、「教育支援システム」ということで、学校、教育委員会を支援するシステムにつきまして。また、「大学・大学院改革」、「社会総がかり」ということで、今までの提言を、ポイントで示

しているというものでございます。

「2. これまでに実施された提言実現のための取組」は、是非こういうことを実施してもらいたいということですが、今までに法律の改正ですとか、予算案の策定とか、政府等でもいろいろな取り組みも行われております。また、問題解決支援チームなど、いろいろなところで地域の取り組みも行われております。

ただ、単に制度を改革する、あるいは予算を確保するというだけでなく、それがしつかりと趣旨・目的に沿った形で現場で実現される、そういうことが重要ですので、そういうことをフォローアップしていこうということで、今まで実現してきた主な事項につきまして、表でまとめております。

例えば、「教員の質の向上」でございますと、教員免許法の改正をこの前の通常国会で行いましたし、「学校の責任体制」ですと、学校教育法の改正というものを رفتたり、教育委員会改革についての法改正、また「9月入学」についての学校教育法施行規則の改正といったあたりで、制度改正や予算案など、いろいろな点で実行に今移されつつあるということを述べております。

そして、こういう提言の実効性担保について、提言の実現とフォローアップ、これが重要であるということで、文部科学省をはじめ関係府省でしっかりと実施計画といったものを策定してもらって、着実に実行してもらいたいとしています。

また、提言が提言に終わることなく現実なものになるよう、実施状況を評価して実効性を担保するための仕組みというものを政府においてつくってもらいたいということを書いてございます。60年ぶりに一昨年、教育基本法が改正されております。いろいろな制度改革も行われております。それを実際に行動に移す、それがかぎを握っているというところを強調したところでございます。

以上でございます。

○野依座長 どうもありがとうございました。

本日は、小野委員、それから陰山委員から資料を提出していただいておりますので、簡単にご説明いただきたいと思います。

まず、小野委員、よろしくお願ひいたします。

○小野委員 私の資料は、この原案の中身を見せていただいたんですが、これもかなりシンプルでいいんですけども、もう少し中身を具体的に書いて方向性を示した方がいいという気持ちから、スタイルとしては全く最終報告（案）と同じなんですけれども、もう少し中身を具体的に書かせていただいております。新しいことはほとんど入れてありませんが、しかし、第一次、第二次、第三次報告の後、今の時点で、とにかく再生会議として、政府にこういうことをぜひやってほしいということを書かせていただきました。

1点だけ申し上げますと、新しいこととしては、「大学・大学院改革」のところですが、国公立大学の連携で、コンソーシアムと前に言っていた事柄なんですけれども、予算も30億円ついたようでございます。国公立を通じた大学院の共同設置だとか、地域における

学部教育の共同実施を推進するということを入れさせていただいております。

あと、財政についても最後のところで少し書かせていただいておりますが、原案のままですと、事柄としてはいいんですけれども、ちょっと簡潔過ぎて訴えるものが少ないかなということで、少し丁寧に、国民の皆さんに訴えられるように書いたつもりでございます。

以上でございます。

○野依座長 どうもありがとうございました。

それでは、陰山委員、よろしく。

○陰山委員 原案を見せていただいたんですけれども、私はすごく弱い感じかなという気がしました。今後フォローアップをしていくという時に、書かれた内容を実行するかしないかということもさることながら、その結果、どのように良くなったかということが出てきて初めて本物ではないかなという気がいたします。ですから、対策のつもりでやったのが逆効果を生むことだって、実は教育行政の中では幾つかあったことがあるわけです。ゆとり教育なんかはその典型だろうと思うんですけれども、そういう点で、やはり実質的に良くなっているということをきちっと目配りしながらやっていくということを基本に据える必要があるのかなと思います。

そういう点で、年末に発表されたPISA2006の結果が大きく成績を落としているということについては、これはやはり現場にいる者からしまして、ちょっと言葉はきついかもしれないですけれども、屈辱に近いショックを受けました。

といいますのは、学力低下問題が本格的に国民的な課題となったのは2003年だろうと思うんですけれども、この2003年の結果が悪かったということで、学力向上の取り組み等が始まったにもかかわらず、その3年後に数値が落ちている。しかも、アジアの主要国、香港、韓国、台湾あたりに比べても落ちてきているということです。

私は、今回、教育再生会議に参加させてもらって一番よかったと思うのは、大学院改革のことについて触れられたことです、全然知らない話でしたから。

今日、ここへ来るときに駅で買ったんですけれども、この「日経ビジネス」なんかでも「世界人材争奪戦」というようなことで、実は、人材の流動化というのは、まさしく教育のグローバル化というものを要求してきている。だから、十数年前には全くなかったこういうPISA調査というものが行われるようになったという、それが背景になっているんだろうと思うわけですね。

やはりこの点では、アジア主要国で落ち込んできているというのは、国内はともかく、外国から見た場合、日本は落ち込んできているんだなど。日本の人材というのは使い物にならないかもしれないというメッセージを送っている危険性があるわけですね。そういう点で、私はこれは非常に重視しなければいけない。

とりわけ科学でありますとか、それから数学でありますとか、本来日本が得意としていた分野が落ち込んできている。だから、ここの部分を次のPISA2009には上げることが僕は至上命題ではないかなと思うんですけれども、これだけ学力低下問題で騒がれた

割には、今回非常にその辺の論調というのがやや弱いようなのはちょっと気になるところです。

私は、短期間にその点では成果を上げなければいけないと思っているんですけども、これは素人のあれで申しわけないかもしれませんが、自分なりに分析をしてみると、実は中学校が弱いんです。PISA2006は15歳で受けますから、2003年に中学校に進学した子供たちが高校で受けているわけなんですね。皆さん、中学校の時間割にロール方式というのがあるのはご存じでしょうか。それは、昔と違って授業時間割が35時間で割られていないものだから、毎週時間割を変えなければいけない。時間数が、要するに多過ぎたり減ったりしたらいけないからというので、毎週時間割を変えるんですね。一学期分の、いわゆる何十日分かの時間割を用意して、一週間ごとに今週はここからここまで、次の週はここからここまででやっているわけですから、ここに出張が入ってくる、教科担任で先生が変わるということになってくると、実はそれだけで手いっぱいというのが今の中学校の現状なんです。ですから、中学校が学力向上の方にいく余裕は実はなかったんですね。

教育再生会議の委員の方に、中学校の先生がいらっしゃらないということも、私はちょっとこれは考えなければならない問題だろうと思っています。というのは、不登校にしてみても、校内暴力にしてみても、いじめにしてみても、大体中学で起きてくるんですね。逆を言えば、中学校を何とかすれば、次の可能性が見えてくるというようなことでも思うわけです。

そこで、参考までに、私がやっておりますプロジェクトの中で、小河先生という中学校の先生が中心になって、山陽小野田というところのある中学校に入って、1カ月間、読み書き、計算のようなものを毎日20分ずつやってもらいました。左にあるような問題をやらしてもらったんですけども、1枚目と2枚目というのは、指導前と指導後です。黄色い部分は誤答です。だから、黄色い部分が減れば減るほど、子供たちの全体の正答率が上がっているというふうに見ていただければいいわけでありまして、そういう点では、約2カ月足らずの間にこれだけ正答率の上昇をもたらすことができます。

ですから、こういうふうな方法もあるわけですから、教育の成果が出るのに時間がかかるということは今言っておれない。そういう点で、効果のあるものからどんどん現場に適用していくようなことをやっていただくということが一つ。

それから、10年に1回という学習指導要領の改訂のサイクルそのものを改めないで、こんなことをやっている国はほとんどないと思うんです。私も、中国の英語教育を視察に行ったときに非常に驚いたんですけども、私より驚いた人がいて、それは誰かというところ、中国のガイドの人です。まだ若い方だったんですけども、自分の子供の頃には想像もできなかったような授業が行われているということで、一番驚いたのは中国人のガイドであると。実はそれぐらいに、やはりドラスティックな改革を行ってきているわけであって、やはりお金もかけているし、手間暇もかけている。やはりそういうふうなところをやって

いかないと、これだけ落ち込んできている中で、従来のようなやり方が果たして通用するのかどうか。私はそういうところもひっくるめて考えなければいけないし、やっけていろいろ思うんですけども、私たちみたいなものが個人でやっているのは所詮限界があります。やはり、日本の教育学部そのものにしっかりしていただいて、各都道府県には国公立の教員養成課程があるわけですから、その県についてはその大学がきちんと責任を持つような形も考えていただいて、しっかりと実績を上げてもらうということです。

最後、ここに書いていないんですけども、できれば、これは前にも言いましたけれども、「教育再生国民会議」みたいな会議をぜひやってほしい、武道館ぐらいで。そうしないと、県教委、市教委それから校長と伝わっていくうちに、情報はどんどん曲がっていて、現場に着いたころには全然似ても似つかぬものになってくるというようなことがあると思うんですね。ですから、そういう点でも、この大学院の改革なんていうのは、私もここに来て初めて知りました。今、普通に現場で働いている小学校の先生だったら、恐らく思いもつかないことだろうと思います。そういう場をぜひとも設定していただきたいということをお願いして終わります。

○野依座長 どうもありがとうございました。

私は、高等教育の国際競争力の喪失を大変憂いておりますけれども、この問題、私は国民がやはり共有しなきゃいけないと思います。親たちが、自分の子供の成績、国内での競争力のことしか関心がないというのは、やはり私は憂慮すべきことだと思いますので、教育再生会議がやはりきちんとこれをリードしていく必要があるんじゃないかと思っております。

どうもありがとうございました。ご意見ございますでしょうか。浅利委員、どうぞ。

○浅利委員 小野委員の提出してくださった資料を拝読したんですが、非常によく書けています。

殊に、「心身ともに健やかな徳のある人間を育てる」という事に対して、徳育を教科として充実させ、自分を見つめ、他を思いやり、感動する心を育てるとともに、人間として必要な規範意識を学校でしっかり教え、身につけさせると、ここまで具体的におっしゃるのはとてもいい。原文をおつくりになった事務局の方にはまことに申しわけないけれども、この項目に関する限り、心身ともに健やかな徳のある人間形成というところの項目に関する限りは、小野委員がおつくりになった文章そのものを最終的なものに入れていただいたらありがたいなと思っております。

○野依座長 どうもありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。

浅利委員、先ほど、生徒あるいは学生たちの国際競争力の問題が出ましたけれども、これは単なる学力だけの問題じゃないんじゃないかと思うんですけども、芸術、文化、それを担う若者たちの国際競争力はいかがでございましょうか。

○浅利委員 私は、毎年俳優をたくさん募集していますけれども、年々国際化しております。しかも、海外から受けにくる子のレベルが大変高いです。日本語での表現ですよ。歌、

音楽的にもすばらしい。

例えば、ちょっと細かいお話をしますと、日本は明治時代に士農工商で、士は共鳴のある声でしゃべっていたんですけれども、農、工、商になると「どうもどうも、今日は本当にありがとうございます」、こういう発声なんですね。ここへクラシックの人が来て、海外からクラシックを教えにきてびっくり仰天したんですね。ですから、響き、響きと言ったものですから、音程も何もない。響きばかり、のどから上の響きばかりが日本の音楽教育の基本になっているんです。ですから、残念なことに、海外に出てオペラハウスを見ても、日本の歌手というのはほとんどいません。これだけ国立大学があったり、音楽教育に対する国庫の補助があるにもかかわらず、オペラ歌手で日本人というのはほとんどいない。

バレリーナは、バレエ団なんて国も補助していないし、自治体も補助していない。先生方が細々やっているだけでもかかわらず、ローザンヌで1位になったバレリーナとか、世界中のバレエ団に日本のプリマドンナがいるんですね。この現実、最初の音楽教育のひずみにあるんです。これはまことに申しわけないんですけれども、東京藝術大学でも根本的に変わらないので、今もってずっと続いていますね。

ところが、韓国から来たら、韓国は実にオーソドックスな発声法をやっているわけなんですね。ですから、変な話ですけれども、私どものカンパニー、今12から13のミュージカルが動いていますけれども、3分の1は韓国人俳優になっています、名前は日本人にしていますけれども。そのぐらい、芸術教育一つでもひずみがあるわけですね。

だから、本当はそういうものもいろいろなところで点検しなきゃならないんですけれども、今、今度の会議に出ていて思ったことは、そんなことよりももっと焦眉の急のことが山のようにある。道徳教育の問題は殊にそうですね。ですけれども、国際的な教育環境というのは、日本よりも周辺諸国の方がかなり熱く盛り上がっていることは間違いありません。芸術教育についてもそうです。

○野依座長 ありがとうございます。品川委員、どうぞ。

○品川委員 ありがとうございます。

私も見せていただきまして、確かに簡潔過ぎると言えば簡潔過ぎるかなとも思ったのですが、最終報告なので逆に細かく同じような話を書く必要もなく、むしろこれまで出した報告を今後どうしていくのかが問われているのではないかと思えばわかりやすいほうがいいだろうと考えました。詳しく知りたい人は、これまで我々が出した報告書を読めばいいというのが私の考えです。

さて、幾つか細かい点を申し上げたいと思います。

まず、「はじめに」のところでございます。最後の章に「すべての子供たち、若者たちの未来のために」と書いていただいております。本当に感謝申し上げます。そのうえであえて気になるので申し上げますが、実は冒頭には「すべて」という言葉が入っていないんですね。どうして私がいつも「すべて」という言葉にこだわるかと申しますと、学校に行かなくなった、あるいは行けなくなった子供・若者たち、学校という所属をなくし

た子供・若者たちはいつも対象外になってしまうからです。そうではなくて、学校不適応・社会不適応を起こした子供たちも、それから外国籍の子供たちも、あるいは法の狭間に落ちてしまって無国籍になっているような子供たちも、保護者に養育力がないような子供たちもみんながみんなこの報告書の対象ですよ。そういったすべての子供が対象だということを明確に読み手に伝えるために、ぜひ冒頭の、「教育の受益者である子供や」というところにとても意味があるので、「すべての」と入れてください。それが1点です。

それからもう一つは、実は、私、いつも考えていることなのですが……。教育というと、必ず「学力向上」が先にくるんですね。いろいろな子供たちを取材したり、子供や若者たちのデータなどを調べておきますと日本の子供というのは非常に自尊心が低いというデータが出ております。会議でも再三申し上げておりますが、自分に価値があると思っている中学生が8.8%しかいない。そんな気持ちでいる子どもたちに「学力向上だ」といって教育を工夫し指導していても、本人たちは「どうせやっちゃしょうがない」と思っているわけですね。つまり、学力をあげるための素地、ベースとでもいいのか、土台が必要なわけです。つまり、理屈からいうと学力向上よりも先にくるのが、基礎体力の向上であり、学力向上とともに自己理解や他者理解を育てセルフエスティームをあげる必要がある。体力をつけるためには規則正しい運動が必要で、規則正しい運動をすることで前頭葉からセロトニンがでる。つまり体力が上がれば集中力があがりますから勉強にも効果が出る。と論理的に考えていきますと、実はこの「心身ともに健やかな徳のある人間を育てる」という文言のほうが先に来て、その次に学力向上なのではないかと考えるわけでございます。PISAのデータがよくないからといって幾ら学力向上を目指して授業時間などをふやしても、俺って生きていたってしょうがないじゃん、自分になんか価値ないじゃんと思っている子供や若者の学力は伸びません。会議でも視察にいった広島少年院で、何で少年たちの学力が伸び、再入院率が低下したかといったら、向井首席は犯罪学や社会学のエビデンスをもとにしてそこを鍛えるプログラムを開発して導入したからなんですね。君は君のままでいい、確かにその通りなんです。でもそれだけじゃ世の中は生き抜いていけないという現実もあるわけです。そこを視野に入れて生き抜くスキルや弾力をつけていくからこそ、俺も頑張ってみようかと思えるわけです。ですので、この部分は実は逆にしたほうがいいのかと考えております。

○浅利委員 大賛成。

○品川委員 ありがとうございます。

それともう一つは、「ゆとり教育を見直し、社会で自立し」というところでございます。どうでしょう、私は人間は自立するだけではだめなのではないかと考えております。自立して「社会に参加」してもらわないといけない、税金払ってもらわないと国は機能しないですよ。自立しても、そのまま海外に行ってしまったら何の意味もないし、税金を払わないで公共サービスは受けようなどということも国民の義務を果たしていないことになる。幾ら大学改革をしても、自立して海外に行ってしまったらどうなのか。そこでここにぜひ、

自立し、参加するという一文入れていただきたいと思います。

そして、3つ目は、この実効性の担保のところでございます。これも再三申し上げていることでございますけれども、議事録や報告書を追っている方は基本的に会議が何を意図しているか解かるという実感があります。講演などでもそういったお話をよく耳にするからです。ですが、議事録に当たらないままなんとなく耳にしたことだけで理解しておられる方々も多数おられるでしょうし、メディアなどのことも考えますと「仕組みを政府においてつくるのが極めて重要です」というこの一文はあまりにさらっとして何もやらないのねという印象を与えるように感じます。これが具体的に、例えば政府のどこがやるのかというようなところまで書くことができればいいのではないかと思っております。また、これも今までも何度も申し上げていることですが、これまでも各省庁でたくさん評価できる政策はされてこられている。ただ、問題はフォローというか、要するに、プラン・ドゥまでやっていて、チェックがないということなんですね。たとえば、文科省では研究開発校という取組みがございます。でも、これは研究期間が終わって発表したら、その後どうなったかわからない。長期的にフォローがないので、本当にその研究開発は効果があったのかどうかなどということがわからないんですね。民間ではありえない。お金をかけて何かを開発したり研究したりしたら、当然その評価、それも短期的にだけではなく中期長期的にみてどうかということが問われます。ですので、再生会議も、これはよかった、これはこういうメリットがあったが、こういうデメリットもあったというような短期中期長期的に分析検証するところまでをやっていく必要がございます。そこまで、あと一歩踏み込んで書いていただければと思います。

以上です。長くてすみません。

○野依座長 ありがとうございます。では、中嶋委員、どうぞ。

○中嶋委員 3点申し上げたいんですけれども、細かいことから申し上げますけれども、小野委員のペーパーの中に、英語教育の抜本的改革を実施するため、小学校から英語を導入し、中学、高校、大学の英語教育の抜本的充実を図るという、これは、長い間の懸案ですから、ぜひこういう具体性が必要だと思います。

というのは、この日曜日に、若干手前味噌になって恐縮ですけれども、私どもの大学で、イスラエルと香港とシンガポール、それぞれ母語が違うんですね、その母語が違うところの英語教育の専門家が来て、雪深い秋田でシンポジウムをやりました。

私も非常に目を開かれたんですけれども、日本はセンター試験にリスニングが入ってきたり、英語教育は改革されつつあるとはいえ、そこでどういうことが話されたかという、例えばボキャブラリーというものの重要性。それは、こういう報告があったんですね。

例えばCNNやBBCを聞いて80%わかるためには、ボキャブラリーの数が何千必要か、そういうようなことから教育するんですね。それから、英字新聞を読むときに、皆さんも読んでいる、私も読むんですけれども、大体わかるけれども、90%わかるのと70%わかるのは違うんですね。例えば、70%わかるためにはどれだけのボキャブラリーが必要か。

今、ゆとり教育のために、日本の中学校英語のボキャブラリーはベースワードが100語になっちゃったから、その派生を入れても500語ぐらいなんですね。改善される学習指導要領では、大体中学でも2,000語ぐらいです。それはやはり国際社会の中の日本ということを考えて、8,000語ぐらいないと、実際にCNNなどを聞いても分からないと、そういうような英語教育のやり方というのは日本では全くやっていないんですね。ですから、英語教育の抜本的改革ということも、そういう意味でも、非常にぜひ今後の日本の国家のために必要だと思います。

それから、もう一つは徳育の点なんですけど、この教育再生会議でみんなが一致した点は、まさに徳育ですよ。小野委員のペーパーには、徳育の教科化ということが入っていましたね。これは私は、「はじめに」の中に入れていただけないのか。ましてや、今の社会的な状況の中で、本当に徳育の必要性というのは国民も期待している、皆さんの一致した目標だと言っていいわけですよ。ですから、この「はじめに」の中に、教育は国家100年の大計です。知・徳・体のバランスのとれた教育環境が整備され、健やかな子供が育まれることは国民の願いですとあります。その後、「最近の社会状況を考えてみても、徳育が学校教育においては不可欠だと思います」というようなことをきちんと入れることが、この教育再生会議の存在を、後に社会に刻み込むことだと思いますので、私は、小野委員の方に入っているけれども、それはむしろ「はじめに」の中に入れてはどうかというふうに思います。それが第2点。

それから、もう一つだけなんですけれども、やはりさっき品川委員の意見もありましたけれども、国民は第一次、第二次、第三次報告をもう一回取り出して見るということはないと思うんですね、なかなか。そうすると、やはりある程度こういう具体性を入れた、パンチの効いたまとめの方がいいと思うので、その点は小野委員に非常によくまとめていただいてあるんじゃないかというふうに私は思いました。

以上です。

○野依座長 どうもありがとうございました。では、葛西委員、どうぞ。

○葛西委員 第一次、第二次、第三次と3回にわたって答申を出してきたわけですから、最終報告は、いかにその実効性を担保するか、そして、そのための有効な仕組みをいかに作るかということについて提言すればいいのではないかと思うんですね。

強いてつけ加えるならば、私は陰山委員の言われたご提案が良いと思います。具体的で明確な目標を持たせるべきですし、その一番の基礎となるのは、やはり「基礎教育における学力」であります。

教育学部と現場との遊離というのは、最近の話ではなく、昔からある問題なんですよ。戦後の教育の中で、いろいろな理念、理論、あるいは思想に基づいて思いつきで試されたことは、ほとんど失敗の繰り返しだったと思います。ですから、もし実効性を担保するというのを強調するのであれば、その担保すべき実効性の具体例として、陰山委員のプランの「実証主義と現場主義に基づいた改革」や「指導要領改定と教科書検定の随時実施」

という内容を入れておくべきだと思います。それらが始まらないと、教育改革の議論というのは、ダイヤモンドのカットのように乱反射して、どこから見ても光っているように見えるが、結果的に効果を生まないということになってしまい、あまり意味がないと思います。

○野依座長 どうもありがとうございます。張委員、どうぞ。

○張委員 今の葛西委員の意見とほとんど一緒なんですけれども、少し具体的に申し上げますと、チェックリストみたいなものをつくって、それを定期的きちんと誰かがチェックする。誰がいいかというのはちょっと議論したいと思うんですけれども、この会議をフォローする後継組織みたいなものがあればいいのかなと思いますけれども、いずれにしても、そういうことを具体的に入れていただきたいと思います。

○野依座長 どうもありがとうございました。官房長官、何かご意見ございませんか。

○町村官房長官 張委員が言われたきちんとした形の組織というか形をつくって、チェックリストをつくり、時系列でどこまでどういったかというのをやはりやっていくというのは大切なことだと、今、それぞれのお話を聞いていて考えたところであり、しっかりと受け止めたい。

○野依座長 社会総がかりでございますので、ぜひ内閣のリーダーシップでこういった提言を実現していただく、そういう仕組みをつくっていただければ大変ありがたいと思っております。

ほかにございますでしょうか。では、小谷委員。

○小谷委員 ありがとうございます。

先ほどの品川委員の意見に大賛成で、私はこの教育再生会議に参加させていただく一番冒頭の時から、学力向上ももちろんそうなんですけれども、学力、学力ときっと皆さんおっしゃるんだろうなというその中で、学力ではなく、まず健やかな心を大切にしましょうよということを申し上げたくてこの会議に参加させていただきましたので、ぜひこの「心身ともに健やかな徳のある人間形成」の部分をもう少し前に持ってくるとか、アピールするように工夫をしていただけたらありがたいなということと、その中に、日本人はもともとやさしい心を持っていたり、学力もそうですけれども、自分の国、親、自分自身に誇りを持てる人間だったと思うんですね。何かもう一度取り戻すというような、今までだめだったから日本人頑張れよというのではなく、日本人としてのすばらしさ、良かったところをもう一度思い出そうよというような何か語りかけみたいなものを含めていただけると非常にハートをつかめるのではないかなという部分。

そして一つ、大変具体的で細かいことで申しわけないんですけれども、学力向上あるいは体を健やかにするためには、20年間落ち続けている体力、体が大切なんだよということを再三申し上げて、それはご理解いただけたと思うんですけれども、「心身ともに健やかな徳のある人間形成」のところの中に体験というのが出てくるんですけれども、ぜひ具体的に、体育を通じて体を鍛えることで健やかな心が宿るんだという部分を強く明記してい

ただきたいなというリクエストをお願いします。

○野依座長 どうもありがとうございました。それでは、池田座長代理、よろしくお願ひします。

○池田座長代理 先ほど、官房長官からも心強いお話をいただきまして、大変ありがたく思っております。そのことに関連してでありますけれども、先ほど、葛西委員、張委員からもお話がございましたように、いかに実効性を担保するかということが重要になってまいります。これまで我々が論議し、提言してきた内容は大変なボリュームで多岐にわたりますが、柱となる大きな項目があります。それらの一つ一つに対して、具体的で明確な目標を定め、張委員が言われるようにチェックリストをつくり、そのうえで新しい組織にバトタッチをさせていただければと思います。そうした我々の要望を反映させていただいた、より具体的な工程表のようなものを別紙としてつけていくということも必要ではないかと思っておりますので、皆さまのご意見をお聞かせいただければと思います。

○野依座長 どうもありがとうございました。ほかに。小野委員、どうぞ。

○小野委員 先ほどから大変ありがたい意見が出ています。例えば、福田内閣としてこの教育再生会議の報告を受けて、またさらにもう少し広がりを持った、例えばですが、「教育再生国民会議」のようなものをお作りいただいて、もう少し働きかけをしていただいて、そして、先ほど来議論が出ておりますアクションプランとか工程表のようなものをつくって、それを政府全体がちゃんとやってくれるかどうかをウォッチしていくということをしていただければ大変ありがたいなというふうに思っております。

○野依座長 ありがとうございます。川勝委員どうぞ。

○川勝委員 運営委員会で十分に発言させていただきましたが、一言だけ。

教育内容が2項目が分けられています。学力の向上と、徳のある人間、そのどちらを先に持ってくるかは座長にお任せしたいと思います。「心身ともに健やかな徳のある人間を育てる」のところで、具体項目でも「社会総がかりで、心身ともに健やかな・・・」とあり、両方に出てきますので、ここをもう少し工夫して、小谷委員の言われたような言葉が入るように、たとえば「心身の基礎」の「心」は、知・情・意に分けられますから、たとえば「知的関心、感動する心、やる気、そして体育を通して、心身の基礎を育てる」と書き足しても一行におさまります。

○野依座長 どうも。それでは、海老名委員、どうぞ。

○海老名委員 徳育を持ってきてくださったので、私は本当にうれしいと思ひました。地域の父兄、お母さん方と先生との交流をもっと深めてほしいなという感じがします。そして、尊敬できる先生をもっとどんどんふやしていただきたい。尊敬できないんです、子供たちが。ですから、尊敬できる先生をと思ひます。

それともう一つ、社会でいろいろな問題が起きていますけれども、やはり親が関心を持たないからだろうと思ひます。学校教育に親がもう少し関心を持てば、社会に出てもいろいろな問題が起こらないんじゃないかなと思ひます。ですから、教育は大切ですし、愛な

のです。

それと、小学校からの英語教育、これも世界に通じるように進めていただきたい、そんな思いでございます。

以上です。

○野依座長 どうもありがとうございました。宮本委員、どうぞ。

○宮本委員 参加させていただいた当初から、プラン・ドゥ・チェックのドゥの部分はどうやって現場に落とし込んでいくのか、チェックの部分はどうするんだと、ずっと疑問を抱えていました。今日の話聞いて少し安心をしているんですが、ここで議論されているさまざまな内容というのは、子供たちのためであり、それをちゃんと届ける義務があると思うんですね。その部分で、心の教育であり、体の教育であり、学力の教育であり、どうやってフォローアップしていくのか、どういった組織でそれを見守っていくのか。リストアップしてデジタル化できるところはとても見やすいと思うんですが、では実際に心の教育というのはどれだけ反映されて、価値があって、どういった結果を生むのか、どうやって測っていくのかというのはすごく難しいかとは思いますが、ぜひそここのところもおざなりにすることなく、デジタルするのは難しいと思うんですが、別の形でも何か見えるような、いい結果が出ましたと思えるようなものをちゃんと見えるところまでは追いかけていってほしいなと思っています。

以上です。

○野依座長 浅利委員、どうぞ。

○浅利委員 もう一言言わせてください。

皆さん、どうでしょう、新聞をお読みになって、親を殺す子、子を殺す親、それから、赤ワインの瓶で夫を殴り殺す妻、裁判所を見ればそうですね。これは、やはり異常な事件じゃないんですね。やはり何か社会的に、根底的なモラルに対する意識がなくなっているんだと思うんです。親を敬うとか、子を愛するとか、夫婦相和しとか、だからやはりどうしても心身ともに健やかな徳のある人間形成というのは今度の答申の最初に来て、芯になっていただきたいということを心からお願いしたいんです。

○海老名委員 「親孝行」という言葉を死語にしてみました。ですから、「親孝行」という言葉をどんどん使ってほしいのです。ぜひお願いいたします。

○野依座長 では陰山委員、どうぞ。

○陰山委員 新しい組織が発足するということで、私は一つ考えていただきたい言葉があるんです。それは「再生」という言葉なんですね。学校の先生方に非常にこれは評判が悪いんです。俺たちは死んでいるのか、死なせているのかと。本当に今回の一連の流れの中で、頑張っている先生方を応援しようということで、ようやく日の目を見なかったところに日が当たり始めて、最近ちょっと新聞による教師バッシングが減ったよねということがちよつと言われるようになってきたんです。

日本の国の教育というのは、ずっとここまでそうなんですけれども、現状の問題点から

入るんですね。だから、教師が悪い、親が悪い、あるいは政府が悪い、大人が悪い、社会が悪いということになっていくわけなんですけれども、そろそろ僕は未来志向でいくべきじゃないかと思うんです。そういう点では、英語教育というのは非常に象徴的なんですよね。日本の教育の中で、異言語を正規に入れようというのは過去前例がなかったわけですから。そもそもそれはなぜなのか。やはり私たちの社会が国際社会の中で、とりわけアジアの人たちと交流しなければやっていけない社会になりつつあるという、非常に日本の社会が新しい段階を迎えつつあるんだと。だから、先生方、新しい社会というのは、こういうふうな教育がないとなかなか難しいんですというような、教師の前向きな姿勢を導き出せるような言葉が冒頭に入っていないんじゃないかと思うんです。ですから、これはここではいいんですけれども、もし次の会議ができるときには、教職員が前向きにいける、会議名称とかひっくるめてお考えいただけたらというふうに思います。

○野依座長 どうもありがとうございました。

○町村官房長官 例えば。

○陰山委員 「創造」とか「新生」とか、やはり「未来のために」とか。

○野依座長 一通りご意見承りましたけれども、小谷委員、どうぞ。

○小谷委員 お仕事を増やしてしまうようで申しわけないんですけれども、先ほどから出ている教育再生会議としての提言のフォローアップ、効果、逆効果とともに、今、皆さんがおかしいぞと思っている、浅利委員がおっしゃったような子供が親を殺すとか、親が子供を殺す、そういう日本になってしまったのは何が原因なのかというのも情報として。例えば、一時スナック菓子を食べ過ぎるとキレる子供が生まれるとか、携帯がいけないとかゲームがいけないとか、何となく子育て中の親はこれはいけないんだなというものは分かっているんですけれども、そういう情報もあわせて発信することができれば、よりやろうとしていることの効果を上げられるのではないかと思うので、ご検討いただきたいと思います。

○野依座長 どうもありがとうございました。

○中嶋委員 「はじめに」のところに、今のグローバル化とか、そういうような言葉というか、何かそういう国際的な関連がこれからの時代にいかに必要かということがちょっとあってもいいかもしれないですね。

○野依座長 ありがとうございます。よろしゅうございますか。官房長官、何かございますか。

○町村官房長官 教育振興基本計画というのが法律に基づいて、今まさにつくられんとしているんですよ。それには、この今の皆さん方のご提言というのがどんな形でうまく取り入れられているのか、反映されているのかをうまく説明できますか、この時点で。

○山中副室長 これは、今、文部科学省の方で教育基本法がつけられましたので、その中で教育振興基本計画をつくるということで進められている……。

○町村官房長官 今年度中につくるといったら、3月までにつくるんじゃないの。

○山中副室長　そういう流れでやっておりますから、そこではできるだけ具体的な目標とか、そういうふうなものを組み込んだ形でつくるという、今まさに検討をしているというところであると思います。

○小野委員　その点は、この会議で、この前ご報告いただいた限りでは、とても計画と言えるようなものではないと私は思いまして、財政面のことももちろん触れられないということが、予算の決定前でしたから、あったんですけれども、それでもやはり、国民の皆さんが、なるほど、教育が計画的によくなっていくんだなということが分かるようなものに是非してほしいと思っております。文科省にはちょっと頑張っていただかないと、この前の案では、とてもじゃないけれども、振興計画とは私は言えないというふうに思っております。余りにも抽象的で、具体性がなく、白書のようなものだと私は思いまして、これではいけないと思っております。

○町村官房長官　せっかく1月に最終報告がまとめられ、教育振興基本計画が2月か3月に出るのならば、そこに関連がほとんどないのでは、ある意味ではこれはおかしいのではないか。早速明日、皆さんの大体まとまったこれらがどこまでどう反映されているのかというのを、よく確認したい。

○山中副室長　この報告の一番最後のところでも、しっかりと文部科学省とか、具体的な計画を立ててもらって、個々の報告について実施していただきたいということで言っております。

○陰山委員　すみません、余談みたいなことになってしまうんですけれども、先ほど、1つだけ気になっているのは、徳育と学力と対立関係にとらえられるものすごく困るんですよね。そこのところを、学力ばかりで、まさにおっしゃるとおりなんですよね。実際僕らが学校現場に行くときに、まず何からやるかといったら、学校というのは勉強するところなので、やれば伸びるということをお子たちに実感させることによって、子供というのは自分に自己肯定感が持てるんですよ。できなかったことができるようになる、分からなかったことが分かるようになっていく。

小谷委員がおっしゃっていたことは非常に重要で、実は本当に土台になっているのは、やはり体力なんです、体なんですよね。ですから、子供たちの成長という観点からまずそれをとらえていただいて、そして心の問題、それから学力の問題、それから体育の問題というように、一つそこのところを抑えていただくことが大事じゃないかなという感じがするんです。

我々が実際現場でやるときに非常に困るのは、さあ勉強やりましょうかというときに、いやそれよりも心が大事みたいなことをおっしゃる方がいるということは、非常に困るんですよね。延春先生はそんなことないと思うんですけれども、ですから、そこのところが、やはり実は本当は一体なんですよね。だから、そこのところをうまく文章表現の方でフォローしていただけるようによろしくお願いします。

○野依座長　では、川勝委員、どうぞ。

○川勝委員 学力はもっぱら成績という観点で見られています。一方、「心身」というとき、その「心」には知力も入ります。知的関心あるいは知的興味といった知力です、それが知・情・意の「知」であり、「情」は感動で演劇とか音楽とかダンスとか感動する心。そして、意欲です。いかに成績がよくても、やる気がある子を育てることが大事です。つまり「心身」の中には、成績に最終的に結びつくものも入っており、決して両者を対立的にとらえているわけではありません。

○野依座長 どうもありがとうございました。小野委員、どうぞ。

○小野委員 1点だけ、私が提出させていただいていますペーパーの「学力の向上」のところですが、実は今、学力で一番心配なのは、子供たちの学習へのモチベーションが低いことなんです。やはりこれを高めるためには、陰山委員もいつもおっしゃっている、わかりやすく魅力のある授業を工夫して、そして、宿題とかテストとか読書活動とか、いろいろなことを、すぐれた先輩とか社会人などの授業で勉強の楽しさを教えるということをぜひ強く言ってほしいなと思います。一番問題なのは、勉強しろと言っても子供は勉強しませんけれども、勉強すると楽しいことがあるよ、学問は楽しいよということをしっかり教えることではないかと思います。

○野依座長 どうもありがとうございました。では、小谷委員、どうぞ。

○小谷委員 すごく小さくて具体的なことで申しわけないんですけども、第三次報告のときからちょっと気になっていたんですけども、「感動する心」というのがたびたび出てくるんですけども、「感動する心を育てる」というのはちょっと私は意味が理解できなくて、心が豊かだと、感動する何かがあったときに感動するんですけども、「感動する心を育てる」というのは何か変じゃないですか。すごくこだわりのところなので、こだわりたいんですけども、「自分を見つめ、他を思いやり、感性豊かな心」とか、この部分の表現は大事にしていきたいなと思います。

○野依座長 ありがとうございます。品川委員、お願いいたします。

○品川委員 すみません、1点、発言させていただけますか。

先ほどから、文科省、文科省という言葉が繰り返しておりますけれども、先ほど浅利委員がご指摘されていらしたような事件などの課題は、いつも行政の隙間に落ち込んでしまうからでございます。学校という所属がなくなったら文科省管轄外、福祉でピックアップされなければ福祉行政にもつながらず、就労もせず自ら働こうという意思も見せなければ労働行政にもつながらずです。結局、事件を起こして司法の管轄下になったときに「そんな問題がうちの地域にあったの」ということになる。ですので、文科省だけではないということを今一度強く強く申し上げたいですし、ここに「関係府省」と書いていただいておりますが、それを今一度関係者の方々が強く「自分も当事者だ」と意識していただけるような文言にさせていただくことを強くお願いいたします。

○野依座長 社会総がかりですから、行政に関しても、文部科学省だけでなく、全省庁が横断的に関与すべきであり、また行政だけでは不十分で、産業界、地域、そして家庭も、

やはり総がかりで教育再生にかかわっていただくことが大事であろうかと思えます。

○浅利委員 具体的に言うと電波界と出版界ですね。それがしっかりしてくれないと困るんですね。

○野依座長 では、中嶋委員。

○中嶋委員 まとめに関して、大分、小野委員のペーパーと、それからこの配られた原案、方向性に若干乖離があるんですけれども、それをどういうふうに整理すべきか。小野委員に対するサポートもあったし、原案に対するサポートもあったし、原案のままで、むしろ余り細かいことは言わなくていいではないかという意見もあったので、その辺のところだけ事務局でまとめるに際して、ちょっと座長の方で総括していただけると良いと思えます。

○野依座長 大勢は、しかし、小野委員の方のペーパーを尊重するといえますか、その方向じゃないかと思っておりますが、いかがでございますか。

○浅利委員 賛成。

○野依座長 どうもありがとうございます。

ご意見を大体いただいたと思えます。内容につきましては、委員の皆様方全員に概ね賛成していただいたと思えます。書きぶりについてさまざまご意見をいただきましたけれども、この取りまとめにつきましては、池田座長代理と私にお任せいただきたいと思います。そして、成案にごく近いものをつくります。何か問題がございましたら、委員の先生方にご意見を賜ることもあろうかと思えますので、その節はよろしくご指導賜りたいと思えます。

運営委員とも相談させていただいて、成案をつくって、総会にかけさせていただきたいと、こういうふうに思っております。よろしゅうございましょうか。

(異議なし)

どうもありがとうございました。それでは、そのようにさせていただきたいと思えます。

冒頭に申し上げたとおりでございますけれども、本日の資料は回収させていただきますので、机の上に置いたままご退席いただきますようお願いいたします

○野依座長 審議は以上でございますけれども、山谷補佐官、何かございますでしょうか。

○山谷総理補佐官 皆様のご意見を、座長がおっしゃってくださいましたような段取りで成案にまとめ、総会にという形で考えておりますので、よろしく願いいたしたいと思えます。

○野依座長 それでは、本日の合同分科会、閉会させていただきます。

本日は皆様大変お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございました。

—了—